職場のリスクマネジメントについて
―潜在リスクを見抜く力の養成を―

大阪大学大学院
人間科学研究科
教授
臼井伸之介
Shinnosuke Usui

事故は日常的に発生するとは言え、さほど頻繁に生じるわけではない。労働災害を例にあげると、その度数率は製造業において、一九八三年は二・〇であったものが、二〇一〇年では〇・九八と半減している。無論、事故が発生した場合、その分析と対策は重要であるが、「事故に学ぶ」という機会は希薄になりつつある。

そこで近年、事業者自らが事故・トラブルに至る可能性のある危険源を特定し、除去する仕組みを文書で手順化し、継続的に改善を図るという労働安全衛生マネジメントシステムが積極的に導入されている。そしてこのマネジメントシステムをより効果的に進めるためには、職場に存在する危険源をいかに的確に抽出し除去するか、すなわちリスクマネジメントが重要な鍵を握る。そこで抽出すべき危険源であるが、それは必ずしも目に見えるものだけではない。人がさまざまな場面で遭遇する危険としては、危険状況がすでに目の前にあって、危険源がはっきりしている「顕在的危険」と、その状況では危険と言えないまでも、今ひとつの条件が加われば危険が現実のものになるという意味で「潜在的危険」の二つに分けることが可能である。無論、われわれが対処しなければならない危険は顕在的、潜在的いずれに対してでもあるが、潜在的危険は気づかれにくいという意味で重要視されるべきである。そのことについてここでは交通場面を例にあげて解説したい。

ドイツで交通危険学を主唱したムンシュ博士は無事故を長年続ける運転者を研究し、「彼らの特徴は危険・事故の可能性が出現したときにアクティブになる」と述べ、そのような潜在的危険状況をディノメンという概念を導入して説明している。交通心理学者の長山氏によると、ディノメンは以下のように紹介される。

「人は各種の危険性に遭遇すると、それに対する誤った対処の仕方から現実の危険、事故にもなるし、適切な対処の仕方から何の問題も起こらない正常のままで経過する場合もある。ムンシュは事故の可能性を潜在的に内包した事態をディノメンと名づけ、その段階での対応の仕方が安全に最も重要であるとした（図1）。ディノメンとはドイツ語でダイナマイトと現象の合成語である。すなわちダイナマイトはそれ自身、静かにおいておけば石のように無害に見えるが、ひとたび扱い方を誤ると爆発を起こすという両面性を持ったものであるからである。例えば前方道路わきで子どもが一人で砂遊びをしており、反対側に友達らしい子どもが出てきた。運転に係わる危険を内包する対象なり事態が生じたわけだが、これがディノメン出現である。ディノメンをいち早く感じ取り、それに対する適切な対応措置をとることが安全にとって重要である。何を危険自体と感知するか、何を危険の前兆と受けとめるかが、事故発生か、安全かの岐路になるポイントである」

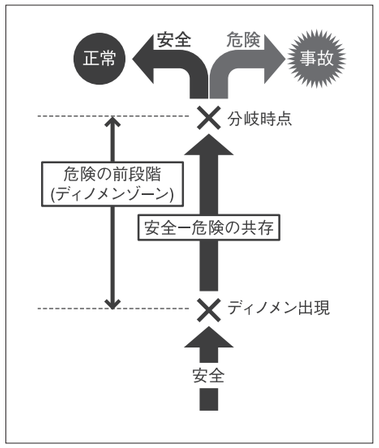

図1 ディノメンプロセス

このようにディノメンはまさにリスクマネジメントで抽出すべき潜在的危険源であり、それは交通場面のみならず、産業場面や日常生活などあらゆる場面に展開可能である。そこで筆者が近年携わった医療事故の原因調査事例から、ディノメン発見の重要性をさらに述べてみたい。

紹介する医療事故は患者の血液型を間違えるという異型輸血事故である。事故は入院中に容体が急変した患者に、予め保管してあった自己血を輸血する過程で生じた。事故発生に係わった種々の要因はここでは省略するが、誤りの発端は看護師が保冷庫に保管してあった本来取り出すべき血液製剤バッグと異なるバッグを取り出したことにあった。当時、病院の当該部署の保冷庫では、六段の棚の一段に一名分のバッグが置かれ、各棚には名前等が書かれた札を吊り下げ、札が付いている棚の上に、該当する血液製剤を置くと決められていた。事故は、救急処置のため急いでいた看護師が血液製剤バッグを取り出す際、保冷庫の一段目の棚に付いていた札に書かれてあった患者の氏名を見て、とっさにその札のすぐ下、つまり二段目に置いてあるバッグを取り出したと推測された（図2）。この札の掛け位置は血液バッグとの対応関係の誤りを誘発するまさにディノメンすなわち潜在的危険源であり、それを事前に検知できなかったのは残念でならない（事故後のヒヤリングでは、その危険性を感じ出来るだけ一段空けて血液バッグを置くようにしていたと述べた看護師もいたが、それを改善に吸い上げるシステムがなかったことも問題点としてあげられる）。事故後はもちろん保管方法は改善されたが、事故が起きてからでは遅い。潜在リスクを見抜く力の養成と、それを改善に結びつけるシステムの確立は今後のリスクマネジメントに一層求められるであろう。

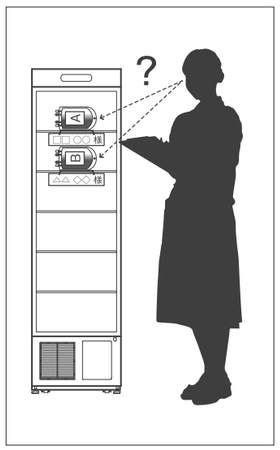

図2 保冷庫の模式図